

# 日帝下朝鮮の地域社会研究と「草の根植民地支配」について —— 1920年代「府・面協議会」の設置と運用事例をもとに

洪 淳 権

## はじめに

この20年余り、日帝下朝鮮における地域社会に関する研究には、多くの蓄積が見られた。このような植民地期地方史研究の隆盛は、韓国内外の学界で続いている「植民地近代化」をめぐる論争と地域史に対する関心の高まりとが相まって生じた現象と見られる。しかるに、日帝下朝鮮の地域社会の性格をどのように理解するかについてはなお解明せねばならない多くの課題がある。本稿は、この間の研究成果を土台としつつ、植民地期の地域社会の性格に関する議論をさらに深めるべく、日帝下「地域社会における植民地支配」の問題について考察するものである。そのためにまず筆者なりにこれまでの研究成果を大別してみると、以下のように整理できる。

第一に、地域社会の社会運動を、植民地期の民族運動の一環として、あるいは民族運動との連関から理解しようとする観点である。民族運動史の側面から青年運動や実力養成運動など、社会運動の流れを地域社会の変化と関連付けて理解しようとする研究がこれに当たる<sup>1</sup>。

第二に、地域社会の開発事業と「植民地公共性」に関する研究がある。植民地期の地域開発または地域開発事業が持つ植民地性と近代性を「植民地公共性」の概念を用いて統合的に理解しようとする近來のさまざまな研究を挙げることができる。最近韓国で刊行された尹海東・ファンビョンジュ編『植民地公共性——実体와 隱喩의 距離』(서해문집, 2010年)は、既存の研究成果に立って「植民地公共性」の問題を総合的にまとめた研究といえる<sup>2</sup>。

第三に、植民地期の地域社会の支配構造に関する研究が挙げられる。植民地期の地方有力者層と植民地当局との権力関係を究明することで、植民地期の地域社会の政治的な支配秩序を明らかにしようとする研究であり、「有志集団」などに関する一連の研究がこれに当たる<sup>3</sup>。

1 これに関する研究は無数にあるが、本稿に関連する釜山・東萊の事例に関する最近の論文を紹介すれば、以下のようなものがある。姜在淳「新幹会 釜山支会와 地域社会運動」(『지역과 역사』第1号、1996年)、李松姫「日帝下 釜山地域の 女性運動 (I) —— 1920年代를 中心으로」(『부산사학』第34集、1998年)、同「日帝下 釜山地域の 女性团体에 関한 研究 —— 1920年代를 中心으로」(『国史館論叢』第83集、1999年)、金勝「韓末・日帝下 東萊地域 民族運動과 社会運動」(『지역과 역사』第6号、2000年)、同「1920年代 慶南東部地域 青年運動」(釜山大学校大学院博士学位論文、2003年)。

2 同書には、尹海東・황명준などの韓国の学者の論考のみならず、この間、日本の学界で関連する問題を掘り下げてきた並木真人の論考も収められている。

3 これに関わるテーマを本格的に探究してきた代表的な研究者として、池秀傑・金翼漢・尹海東らが挙